

1 文法編

1	副詞を表す活用接頭辞は o と e を使い分ける	6
2	動詞を修飾詞修飾型副詞で修飾する際は vel を介する	8
3	固有名詞を修飾するときは挿入構文にする	10
4	呼びかけをするときは yo を付ける	12
5	名詞だけを言いたい場合でも助詞が必要になる	14

2 語法編

6	習慣は vom を用いた反復表現で表す	18
7	他動詞と使役構文は意味が明確に異なる	20
8	主語の tel や loc は基本的に省略できない	22
9	命令文での命令対象を表す loc は省略できない	24
10	選択疑問文の選択肢を繋げる連結詞は á を用いる	26
11	選択肢を表す ve 句では連結詞に o を用いる	28
12	能力可能か状況可能で kil と qif は使い分ける	30
13	シャレイア語の助接詞は日本語の助詞と必ずしも対応しない	32
14	名詞修飾の助接詞は必ずしも i ではない	34
15	動作中や動作後の状態は se で表す	36
16	結果目的語には qe を用いる	38
17	新しく生じるものには qe を使い変化後の状態には se を使う	40
18	目的に人を置く場合は sora を用いる	42
19	単位名詞は常に le とともに用いる	44

3 虚無編

20	レイアウトテスト	48
----	----------------	----

1

文法編

シャレイア語の文法は非常に規範的なので、作った文が文法的に正しいかを常に気にする必要があります。この章では、初学者が犯しがちな文法的な誤りを含む文を集めました。

副詞を表す活用接頭辞は o と e を使い分ける

破門

× salat a micés afik e amay obam.

○ salat a micés afik e amay ebam.

→ このイチゴはとても甘い。

解説

シャレイア語において、文中で副詞として使える単語には、動詞型不定詞と副詞型不定詞の2種類があります。動詞型不定詞を副詞として使う場合は o を接頭しますが、副詞型不定詞を副詞として使う場合は e を接頭します。使う活用接頭辞が異なるので、注意する必要があります。

副詞型不定詞に o を付けるなど、異なる接頭辞を用いたものは文法的に誤りとなります。

× salat a micés afik e amay obam.

「とても」を意味する bam は副詞型不定詞なので、副詞として用いるときは e を付けなければなりません。

○ salat a micés afik e amay ebam.

→ このイチゴはとても甘い。

したがって、ある単語を副詞として使いたいとき、それが動詞型不定詞なのか副詞型不定詞なのかを知っておく必要があります。これは辞書を見れば確認できますが、より手軽な判定方法があります。

動詞型不定詞由来の副詞は、必ず動詞を修飾し、他の文法的品詞の単語を修飾することはありません。一方で副詞型不定詞由来の副詞は、動詞を修飾す

ることもありますが、動詞以外も修飾することができます。そのため、動詞を修飾できるかを考えることで、動詞型不定詞なのか副詞型不定詞なのかを見分けることができます。

例えば、**bam** は副詞として「とても」という意味ですが、これは「とても甘い」などのように形容詞も修飾できます。したがって、**bam** は副詞型不定詞であることが分かり、副詞としての活用形は **ebam** になります。

また、**fimer** は副詞として「そっと」の意味です。これは「そっと撫でる」のように動詞を修飾し、「そっと甘い」や「そっと机」のように形容詞や名詞を修飾することはありません。そのため、**fimer** は動詞型不定詞であり、副詞としての形は **ofimer** となります。

○ fanales ofimer a ces e soz i tel.

→ 彼はそっと私の頭を撫でた。

動詞のみを修飾する副詞とそれ以外も修飾できる副詞は、どちらもまとめて「副詞」という文法的品詞で説明されることが多いですが、もととなる語彙的品詞も異なりますし、付ける活用接頭辞も異なるので、初めから別物として考えた方が混乱も少ないでしょう。

動詞を修飾詞修飾型副詞で修飾する際は *vel* を介する

破門

×

○

→

----- 解説 -----

固有名詞を修飾するときは挿入構文にする

破門

×

○

→

----- 解説 -----

4

呼びかけをするときは yo を付ける

関連項目: 5

破門

×

○

→

----- 解説 -----

名詞だけを言いたい場合でも助詞が必要になる

関連項目: 4

破門

×

○

→

----- 解説 -----

2

語法編

文法的に正しい文であればどんな文も自然であるというわけではありません。文法的な間違いが全くなくても、そのような表現は普通しないといったような文はたくさんあります。この章では、文法は正しくても表現が不自然な文を集めました。

破門

× catsatas olof a tel vo fecil ica sod.

○ vomac catsatos olof a tel vo fecil ica sod.

→ 私はよく家の周りを散歩する。

----- 解説 -----

現在続けている習慣的な動作を表現したいとき、英語では単に動詞を現在形にすれば良いだけですが、同じように考えてシャレイア語で現在時制無相にしてしまうと、不自然な表現になってしまいます。

シャレイア語で習慣を表したい場合、反復を表す vom を使います。現在続けている習慣であれば、現在という時間でその行為を何度も反復している最中であるということなので、vom は現在時制経過相にします。

vom は e 句に反復する内容をとりませんが、このときの反復内容を表す動詞は通時時制にするのが自然です。動作を反復しているわけなので、その動作は過去でも未来でも行われていることになるためです。

○ vomac e kin catsatos olof a tel vo fecil ica sod.

→ 私はよく家の周りを散歩する。

vom は助動詞的に用いることが可能なので、e kin の部分を省略して、vom の直後に動詞が置かれる形にすることができます。これが最初に掲げた形です。基本的にこの形の方が好まれます。

○ vomac catsatos olof a tel vo fecil ica sod.

現在の習慣であるということに引き摺られて、vom に係る e 句の中の動詞も

現在時制にしないように注意してください。

× vomac catsatas olof a tel vo fecil ica sod.

習慣を表す場合、vom そのものを通時時制にすることもありません。

× vomoc catsatas olof a tel vo fecil ica sod.

vom を過去時制もしくは未来時制にすることで、過去に行っていた習慣や未来に行うであろう習慣を表すこともできます。この場合でも、vom に続く習慣の内容を表す動詞は通時時制にします。

○ vomec sôdos a tel e ritif te lon atov.

→ 私は毎晩魚を食べていた。

○ kozeses a ces ca tel e'n vomic feketos a's te tat ile tef aric.

→ 彼は私に6時に起き続けることを約束した。

他動詞と使役構文は意味が明確に異なる

破門

×

○

→

----- 解説 -----

主語の tel や loc は基本的に省略できない

関連項目: 9

破門

× lanes te tazîť ca kosxoq.

○ lanes a tel te tazîť ca kosxoq.

→ 昨日は図書館に行った。

解説

日本語では、文脈から容易に推測できる主語は省略される傾向があり、特に「私」が主語になる場合はよく省略されます。しかし、シャレイア語で主語を省略すると、文脈によらず「何らかの人」のようなものが省略されていると解釈されてしまいます。

冒頭で掲げた以下の文では、主語が明示されていません。この文は非常に不自然です。

× lanes te tazîť ca kosxoq.

自然でない理由は以下のように説明できます。すでに述べたように、主語が明示されていない場合は、主語は「何らかの人」であると解釈されます。つまり、上の文は「どこかの誰かが昨日図書館に行った」という内容を表すことになります。このようなほとんど情報量がない内容を伝えたいことはとても稀なので、不自然に感じられるのです。

同じような理由で、疑問文において尋ねている相手を表す loc も基本的に省略されません。

× pa sokat e'n yekilac te sot vo 'tokos?

以下のように、loc を明示するのが正しい表現です。

○ pa sokat a loç e'n yekilac te sot vo 'tokos?

→ 東京で今雪が降っているということを知っていますか?

なお、シャレイア語では必ず主語を明示しなければいけないというわけではありません。主語を省略すると「何らかの人」の省略だと見なされるわけですが、そのように解釈されて構わないのであれば省略されます。その代表的な例が受動態相当表現です。

○ votiqat e likok afik ca tirmal.

→ このコップはジュースで満たされている。

この文には主語がなく、したがって「誰かがコップをジュースで満たした状態である」という意味で解釈されます。この文が述べたいことは、コップがジュースで満たされていることであって、満たしたのが誰かについては問題にしていないので、まさにこの解釈で良いのです。

命令文での命令対象を表す loc は省略できない

関連項目: 8

破門

× di'teyelis e sokul afik.

○ di'teyelis a'c e sokul afik.

→ この部屋を掃除して。

----- 解説 -----

命令文における命令対象を表す loc は省略できません。これは、省略されている助詞句に関しては「何らかの人」や「何らかのもの」が省略されたと解釈されるため、命令対象の loc を明示しないと、命令対象が明確に loc であることが暗示されないからです。以下のように、loc を明示するのが正しい表現です。

○ di'teyelis a loc e sokul afik.

→ この部屋を掃除して。

基本的に主語を省略しない英語でも、命令対象の you を明示することは基本的にないので、それにつられてシャレイア語でも loc を省略したくなりますが、それは誤りです。

× di'teyelis e sokul afik.

なお、loc には 'c という縮約形があり、命令文では 'c を用いた形の方が好まれます。通常、縮約形は同じ文中で 2 回目以降に出てきた場合に用いられますが、命令文の loc については 1 回目でも例外的に縮約形を用いることができます。

○ di'teyelis a'c e sokul afik.

命令内容に *zál* があると「～しましょう」という勧誘の表現になりますが、当然この *zál* も省略できません。上に述べたような理由もありますし、*zál* を省略してしまうと、命令対象が *loc* なのか *zál* なのか分からなくなるためという理由もあります。

○ *dì'rahitis a zál te tacál e rakal.*

→ 明日はゲームをして遊びましょう。

選択疑問文の選択肢を繋げる連結詞は á を用いる

関連項目: 11

破門

× pa sâfat ovel emic a loc e dales é monaf?

○ pa sâfat ovel emic a loc e dales á monaf?

→ 犬と猫ではどちらがより好きですか?

解説

複数の選択肢の中から答えを問う選択疑問文において、選択肢を繋げる連結詞には á を用います。

○ pa sâfat ovel emic a loc e dales á monaf?

→ 犬と猫ではどちらがより好きですか?

英語で同じような選択疑問文を作るときは or を用います。この or に相当するシャレイア語の連結詞として é がありますが、選択疑問文では é は使いません。

× pa sâfat ovel emic a loc e dales é monaf?

é は繋いでいる語句のどれか 1 つを指す役割をもちます。したがって、é を疑問文で用いると、それが繋いでいる語句のうちのどれか 1 つについて、尋ねている内容が正しいかどうかを問う諾否疑問文になります。これを踏まえると、上の文は、「犬または猫のどちらか一方」について他の何かと比べてより好きかどうかを尋ねていることになります。何と比べているのかも分かりませんし、これでは不自然です。

なお、疑問文で é を使うことがないわけではありません。例えば、以下の文は十分自然です。

○ pa qeorases a loc ca feranes é jemanis?

→ フランスかドイツに旅行に行ったことはありますか?

ヨーロッパの話をしていて、相手にヨーロッパへの旅行経験を聞くために、ヨーロッパの国の代表例としてフランスとドイツを挙げて、どちらかに行ったことがあるか尋ねる場面を想像してください。この文を尋ねられた人は、フランスに旅行したことがあるかドイツに旅行したことがあるなら ya で答え、どちらも旅行したことがなければ du で答えることになります。

この場合、éではなくáを使って選択疑問文にした文も自然です。

○ pa qeorases a loc ca feranes á jemanis?

→ フランスかドイツのどちらに旅行に行ったのですか?

この疑問文が話される場面としては、例えば、相手がフランスかドイツのどちらかに行ったことは覚えていたものの、どちらなのかを忘れてしまっていて、それを相手に確認したい場面などが考えられます。尋ねられた側は、選択肢である feranes か jemanis のどちらかで回答することになります。

以上のように、選択肢を提示してそのうちのどれかを選ばせたいときはáを用い、いくつかの候補のうちのどれかについては正しいのかを確認したい場合はéを用います。

選択肢を表す ve 句では連結詞に o を用いる

関連項目: 10

破門

× pa câses a loc e ces te pet ive saq á tazîť?

○ pa câses a loc e ces te pet ive saq o tazîť?

→ あなたが彼と会ったのは今日か昨日のどちらですか?

解説

ve を用いた選択疑問文において、ive 句の中の選択肢を繋ぐ連結詞には o を用います。

○ pa câses a loc e ces te pet ive saq o tazîť?

→ あなたが彼と会ったのは今日か昨日のどちらですか?

選択疑問文を作る方法は、中に選択肢を列挙した ive 句で疑問代詞を修飾するものと、疑問代詞を使わずに選択肢を á で繋げるものの、2種類があります。後者の方法では á を使うことから、前者の方法でも á を使いそうになりますが、それは誤りです。

× pa câses a loc e ces te pet ive saq á tazîť?

選択肢を á で繋げる表現では、疑問代詞は使わず、á で繋げた語句をそのまま文中に置きます。

○ pa câses a loc e ces te saq á tazîť?

→ あなたが彼と会ったのは今日か昨日のどちらですか?

能力可能か状況可能で kil と qif は使い分ける

破門

×

○

→

----- 解説 -----

シャレイア語の助接詞は日本語の助詞と必ずしも対応しない

破門

× zizetes a tel e dales zecasac a.

○ zizetes a tel ca dales zecasac a.

→ 私は逃げる犬を追いかけた。

解説

シャレイア語の助接詞のうち a, e, ca, zi の4つは基本的なもので、とても頻繁に使われます。これらの助接詞は、日本語の助詞である「は」、「を」、「に」、「から」とそれぞれ概ね対応しますが、この対応を過信してはいけません。動詞によっては、この対応とはかけ離れた意味で使われることがあります。

例えば、「追いかける」を意味する zizet は、追いかける対象を ca 句に取ります。日本語では「～に追いかける」ではなく「～を追いかける」と表現するので、これに引き摺られて e を使いそうになりますが、e を使うのは間違いです。

× zizetes a tel e dales zecasac a.

このような動詞の例は、zizet の他にもたくさんあります。例えば、「通過する」を意味する liteq は、通過する場所を ca 句で表します。

○ liteqes a tel ca caf izi sod i refet.

→ 私は友達の家の前を通過した。

日本語では「～を通過する」と言いますが、通過する場所を e で表現するのは誤りです。

× liteqes a tel e caf izi sod i refet.

別の例として、「飽きさせる」を意味する *pôz* を挙げておきます。この単語は、飽きた内容を *zi* 句に取り、その内容に飽きている人を *e* 句に取ります。

○ *pôzet e tel zi'n licac a'l e lasav acik.*

→ 私はそのアニメを見るのに飽きていた。

日本語の「～に飽きる」に影響されて、*ca* を使わないようにしましょう。

× *pôzet e tel ca'n licac a'l e lasav acik.*

何をどの助接詞で表すかは、辞書を引くことで確認することができます。例えば、*pôz* の語義を辞書で調べると、「*zi* をこれ以上続けるのが嫌な気持ちに *e* をさせる」などと書いてあるので、飽きる内容が *zi* 句で飽きる人が *e* 句であることが分かります。

破門

×

○

→

----- 解説 -----

破門

× xílac a xàk aquk obig.

○ xílac a xàk aquk se abig.

→ あの照明は青く光っている。

----- 解説 -----

破門

× debêkes a tel e denos.○ debêkes a tel qe denos.

→ 私は穴を掘った。

----- 解説 -----

「掘る」という動詞について考えてみましょう。日本語では、「地面を掘る」も「穴を掘る」も自然な表現です。ここで、前者の目的語である「地面」は、「掘る」という動作の対象です。一方で後者の「穴」は、「掘る」という動作の対象というより、「掘る」という動作を行った結果生じるものです。このような動作を行った結果新たに生じるものは、一般に「結果目的語」と呼ばれます。

すでに述べたように、日本語では、結果目的語も普通の目的語の位置に置けます。しかしシャレイア語では、結果目的語は **qe** という専用の助接詞で表し、普通の目的語と区別します。

「地面を掘る」と「穴を掘る」という2つの表現において、前者の「地面」は普通の目的語で、後者の「穴」は結果目的語です。したがって、前者は **e** を用いて表現し、後者は **qe** を用いて表現しなければなりません。

○ debêkes a tel e sodel.

→ 私は地面を掘った。

○ debêkes a tel qe denos.

→ 私は穴を掘った。

e と **qe** は明確に区別されるので、混同しないように気をつけてください。逆

にしてしまうと誤った表現になります。

× debêkes a tel qe sodel.

× debêkes a tel e denos.

結果目的語の別の例も挙げておきましょう。

○ di'zacfodiz a'c qe rix azâg.

→ お湯を沸かして。

○ micqites a ces sora fay qe solnísid ahafes.

→ 彼は娘のためにピンクのセーターを編んだ。

なお、「作る」を意味する qik は、新たに作られるものを e 句として取ることになっています。そのため、qik に対して qe を使うことはなく、以下のようになるのが正しい文です。上の 2 つ目の例文と比較してください。

○ qikes a ces sora fay e solnísid ahafes.

→ 彼は娘のためにピンクのセーターを作った。

新しく生じるものには qe を使い変化後の状態には se を使う

関連項目: 15, 16

破門

×

○

→

----- 解説 -----

- zacfodes a tel qe rix azag.
→ 私はお湯を沸かした。
- zacfodes a tel e rix se azag.
→ 私はお湯を沸かした。

破門

× feges a tel e yelicnelas so ces.

○ feges a tel e yelicnelas sora ces.

→ 私は彼女のためにネックレスを買った。

----- 解説 -----

破門

× vilises a tel te saq la nolôt ayoset.

○ vilises a tel te saq la lim alot ile nolôt ayoset.

→ 私は今日 3 km 走った。

----- 解説 -----

3

虚無編

以降のページは、デザインなどを確認するためのものです。内容などはあまり気にしないでください。

破門

× salat a ces e latvác atisetsez olôx.

○ salat a ces e alosod ile latvác atisetsez olôx.

→ 彼女は永遠の 17 歳だ。

----- 解説 -----

Здравствуйте! Ça va? Σημεῖόν ἐστίν, οὐ μέρος οὐθέν. The fluffy fjord is difficult to find. 日本語でお k。ピリオドと句点の後のスペーシングを調整しているので、良い感じになっているか確認してください。

文中には `dojat e tel` のようにシャレイア語が挟まることがありますが、ここでフォントを変えます。`salat a S e Z` のように、イタリックにするコマンドにも対応しているはずです。変わっているか確認してください。

例文は 2 つ以上並べることもできます。また、例文ブロックが隣接した場合のスペース量も確認してください。

○ salat a fit e lêdik.

→ これは文です。

○ salat a fit e lêdik axaslef.

→ これは素晴らしい文です。

× salat a fit e lêdik.

× salat a fit e lêdik axaslef.

Lorem ipsum dolor sit amet, consectetur adipiscing elit, sed do eiusmod tempor incididunt ut labore et dolore magna aliqua. Ut enim ad minim veniam, quis nostrud

exercitation ullamco laboris nisi ut aliquip ex ea commodo consequat. Duis aute irure dolor in reprehenderit in voluptate velit esse cillum dolore eu fugiat nulla pariatur. Excepteur sint occaecat cupidatat non proident, sunt in culpa qui officia deserunt mollit anim id est laborum.